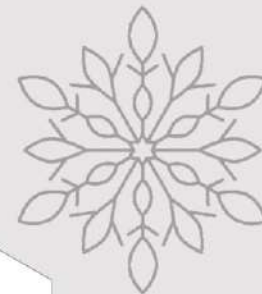


NEW JAPAN
*P*HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2025/2026シーズン



1

January, 2026

2

February, 2026



2025/2026 シーズン

新日本フィルハーモニー交響楽団 1、2月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #35 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #667 石川亮子	7
楽員ストーリーズ ⑤② 大腰泰成 (ヴァイオリン)	13
NJP from Inside	14
NJP 2月、3月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	16
2026 / 2027シーズン 定期演奏会プログラム	18
お客様からの声	26
室内楽シリーズ	29
「パトロネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。



1.9 [金] 10 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第35回

2026年1月 9日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール

1月10日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●ウェーバー (1786-1826)

歌劇『オペロン』序曲

Carl Maria von Weber: Overture to "Oberon"

約10分

●モーツァルト (1756-91)

ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調 K. 595 *

Wolfgang Amadeus Mozart: Piano Concerto No. 27 in B-flat major, K. 595 *

約30分

I. Allegro

II. Larghetto

III. Allegro

—— 休憩20分 ——

●ブラームス (1833-97)

交響曲第4番 ホ短調 op. 98

Johannes Brahms: Symphony No. 4 in E minor, op. 98

約40分

I. Allegro non troppo

II. Andante moderato

III. Allegro giocoso

IV. Allegro energico e passionato

[指揮] ユアン・シールズ

Euan Shields, Conductor

[ピアノ] 反田恭平 *

Kyohei Sorita, Piano *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団)

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

■後援：オーストリア大使館／オーストリア文化フォーラム東京、ドイツ連邦共和国大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。

<https://www.njp.or.jp/qs>



いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどで紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オーストリア文化フォーラム
austrian cultural forum

ドイツ連邦共和国大使館
東京

Profile



©Bill Lam

ユアン・シールズ [指揮] Euan Shields, Conductor

2023年、シーメンス・ハレ国際指揮者コンクール優勝。現在、ハレ管弦楽団のアシスタント指揮者、ハレ・ユース・オーケストラの音楽監督。

1998年、大阪生まれ。幼い頃からチェロを学ぶ。13歳の時、アメリカに移住。世界各地のマスタークラスに参加、指揮を学ぶ。また、ミルガ・グラジニーテ=ティエラ、ヨハネス・シュレーフリ、ヨルマ・パヌラ、シャーン・エドワーズらの教えを受ける。2022年、モナコで開催された、第5回エフゲニー・スヴェトラノフ指揮者コンクールでファイナリストとなる。これまでに、モンテカルロ・フィル、ハレ管、南デンマーク・フィルなどを指揮。23年、シオルティ財団よりキャリア・アシスタンス・アワードが授与された。24年10月、KNSO指揮者コンクール第2位。25年11月、マンチェスターで行われたジョン・アダムズ・フェスティバルで、「室内交響曲」を指揮。作曲者より「これまでのこの作品の演奏で最高のものの一つ」という賛辞を受けた。同月、大阪交響楽団の定期演奏会で日本デビュー。



©Yuji Ueno

反田恭平 [ピアノ] Kyohei Sorita, Piano

2021年、第18回ショパン国際ピアノ・コンクールにて日本人では半世紀ぶり最高位となる第2位を受賞し、世界の注目を集めた。16年のデビュー以降、幅広い聴衆を魅了し続けており、国内外のオーケストラとの共演回数はすでに300回以上に及ぶ。21年には自身のオーケストラであるJapan National Orchestra (JNO) を株式会社化し、ファンと音楽家を繋ぐ音楽サロン「Solistiade」を立ち上げた。現在はウィーンを拠点に、ヨーロッパ、カナダ、アジアなど世界中で活躍。

24年、米フォーブス誌の「Forbes 30 Under 30 Asia - Class of 2024」に選出された。25年には、モーツァルトウム管との再共演で、ザルツブルク音楽祭史上初となる弾き振りで出演を果たした他、ソリストとしてミュンヘン・フィル、トーンクンストラー管定期公演への再出演、国内ではベルリン・フィルメンバーで結成されたシャルーン・アンサンブル・ベルリンとの室内楽ツアーなどを行う。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

作曲家の死にまつわるエピソードは魅惑的に語られがちだ。例えば、ヨハン・セバスティアン・バッハ「フーガの技法」の未完成で遺された自筆譜の最後に、次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハは父がこの部分を作曲している時に亡くなったのだと書き加えている。だが実際は、最晩年に視力が悪くなる前に書かれた楽譜であることがわかっており、死によって未完成になったわけではないと考えられている。あるいはヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)が亡くなる間際で作曲していた「レクイエム」にサリエリが協力していたというのも映画『アマデウス』の原作となった戯曲による創作だ。言うまでもないが、交響曲を9曲書くとは死ぬというのも迷信に過ぎない。

■ ウェーバー：歌劇『オベロン』序曲

オペラに才能を発揮 ▶ モーツァルトの妻コンスタンツェの従弟にあたるのがカール・マリア・フォン・ウェーバー(1786~1826)だ。ベートーヴェンとシューベルトの間の世代にあたるドイツの作曲家で、ベートーヴェンが亡くなる1年前に39歳でこの世を去っている。交響曲から舞台作品まで、まんべんなく多彩な音楽を残したが、音楽史における重要作と目されているのは、ワーグナーにも多大な影響を与えた『魔弾の射手』(1821)に代表されるオペラだ。

ウェーバーが幼い頃、父親は劇団を巡業する仕事を手掛けており、ウェーバー自身も子役として舞台に立っている。ところが事業がうまくいかなかった後の父は、ウェーバーを音楽の神童としてデビューさせることに力を注いでいく。ヨーゼフ・ハイドンの弟ミヒャエル・ハイドンにも対位法を習ったが、最初に成功したオペラ『アブ・ハッサン』(1811)はゲオルク・ヨーゼフ・フォークラーのもとで作曲された。なおマイアベーア(1791~1864/19世紀前半のフランスで大成功し、ワーグナーにも影響を与えたオペラ作曲家)も同門出身である。

大成功を収めた最後のオペラ ▶ 『オベロン』は英語のオペラで、原作はシェイクスピアではないのだが『夏の夜の夢』と『テンペスト』の要素が部分的に取り入れられている。1826年4月12日にロンドンでウェーバー自身の指揮によって初演されて大成功を収めたが、その2ヶ月後、ドイツに帰国することなくウェーバーは39歳で急逝。『オベロン』は最後のオペラになってしまった。序奏付きの自由なソナタ形式によって作曲された序曲は、劇中の素材を組み

合わせており、例えば冒頭のホルンは妖精の王オベロンの角笛をあらわしている。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

■ モーツァルト：ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調 K.595

最後の年に誕生 ▶

1791年12月5日、モーツァルトは35年の短い生涯を閉じた。この年には「レクイエム」だけでなく、「アヴェ・ヴェルム・コルプス」「魔笛」「クラリネット協奏曲」といった傑作が作曲されており、モーツァルトにとって最後のピアノ協奏曲となった本作もそのひとつである。ただし第1楽章の冒頭あたりは、3年前の第26番「戴冠式」(1788)の時期に使用していた五線紙に書かれていることが判明している。その頃に着想した断片をもとにして、第27番は作曲されたのかもしれない。

初演が最後のステージに ▶

自筆譜に書かれた完成日は1791年1月5日。つまり亡くなる11ヶ月前であり、この時点でモーツァルトが早すぎる死を予感していた可能性は低い。しかし第3楽章の主題と共通するモーツァルトの歌曲「春への憧れ」K.596が、春に咲くスマレを待ち望んで冬の寒さを忍ぶ内容なので、近づく死を振りほどこうとしているような印象も受けるが、これもまたロマンティック過ぎる解釈なのだろう。ただ、この曲がモーツァルト自身の演奏で初演された1791年3月4日が、演奏家として最後のステージとなったのは事実である。またモーツァルト自身によって作曲された(ピアノ独奏だけで演奏される)カデンツァが遺されているのは、ピアノ協奏曲第23番以来である。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章はソナタ形式。協奏曲なので提示部の1周目は管弦楽だけではじまる。2周目からピアノ独奏が加わると、少しずつロマンティックな色合いが増し、そして展開部で音楽が悲しみに転じると、更にドラマティックさが加わる。

第2楽章は三部形式による緩徐楽章だ。音楽はピアノ独奏を軸に進んでいき、そこに管弦楽が様々な絡み方をしていく。変ロ長調なのだが、何故か悲しみを隠しているようにも聴こえるのは、管弦楽だけになると時おり悲しみが漏れでてくるからだろうか？

第3楽章は冒頭でピアノが提示するロンド形式が何度もリフレインするロンド形式が基調となっている。ただしロンド主題が大胆に変奏される

ため、まるでソナタ形式の展開部のような印象も受けるだろう。終盤に控えるカデンツァの他、アインガングと呼ばれるピアノの短いソロが何度か挟まれる場合がある。

[楽器編成] ピアノ独奏、フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部。

■ ブラームス：交響曲第4番 ホ短調 op.98

最後から2番目の管弦楽曲 ▶

ヨハネス・ブラームス(1833~97)が自身の死を強く意識するようになるのは、遺言書(いわゆる「イシュル遺書」)を書いた1891年頃からとされている。この交響曲が作曲されたのはそれよりも前だ。だがブラームスは1887年の二重協奏曲より後にオーケストラ作品を完成させることはなく、1884~85年に作曲された交響曲第4番が最後から2番目の管弦楽曲にあたる(この第4番のあとにも交響曲用に2つの楽章の創作が試みられたそうだが、完成することはなかった)。

晩年の作品に頻出するアプローチ ▶

第1楽章の第1主題は、3度下行を繰り返すシンプルな法則をもとに作られていると、後にシェーンベルクが指摘。こうしたアプローチは晩年の作品で頻出するため、この交響曲第4番をもってブラームスの晩年がはじまったともみなせる。古典的な楽章構成だが、4つの楽章全てにソナタ形式的な要素が含まれている。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章はソナタ形式。前述した第1主題を筆頭とする下行していく物悲しい旋律と、それに抗うような上行していく力強い旋律がぶつかっていく。提示部の繰り返しのようにはみせかけて、展開部へと進んでいくのも特徴的だ。

第2楽章は前楽章を経て、老いを受け入れたかのような緩徐楽章。ソナタ形式だが展開部のない代わりに、再現部で主題が展開されていく。

第3楽章はスケルツォ。明るく元気に満ちているが、時おり枯れた雰囲気も顔を出す。

第4楽章はバロック時代のシャコンヌ(もしくはパッサカリヤ)をモデルにした変奏曲。冒頭に管打楽器によって奏される8小節のシャコンヌ主題が、36回も変奏されていく。結尾(コーダ)直前にあたる第29変奏では、(聴覚上だけでは分かりづらいが)シャコンヌ主題が第1楽章 第1主題の変奏であったネタばらしがなされる。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2025-2026 Season
#667

1.31 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第667回定期演奏会
2026年1月31日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

2.1 [日]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第667回定期演奏会
2026年2月1日(日) 14時00分
サントリーホール

<指揮者によるプレトーク(開演約10分前~)>

●ガーシュウィン(1898-1937)

ピアノ協奏曲 ヘ調 *

George Gershwin: Piano Concerto in F *

約35分

I. Allegro

II. Adagio - Andante con moto

III. Allegro agitato

—— 休憩20分 ——

●バルトーク(1881-1945)

管弦楽のための協奏曲 Sz. 116, BB123

Béla Bartók: Concerto for Orchestra, Sz. 116, BB123

約40分

I. 序章 Introduzione: Andante non troppo - Allegro vivace

II. 対の遊び Giuoco delle coppie: Allegro scherzando

III. 悲歌 Elegia: Andante, non troppo

IV. 中断された間奏曲 Intermezzo interrotto: Allegretto

V. 終曲 Finale: Pesante - Presto

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[ピアノ] 上原ひろみ *

Hiromi Uehara, Piano *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール(公益財団法人墨田区文化振興財団) [1/31公演]
■特別協賛：オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくする。
そのころざしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

豊島美術館

鹿島特設サイト



100年をつくる会社
鹿島

Profile



©Takashi Iijima

佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン指揮者コンクール優勝。これまでパリ管弦楽団、ロンドン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など、欧州の名門オーケストラに多数客演を重ねている。2025年6月までオーストリアを代表し110年以上の歴史を持つトーンキュンストラ管弦楽団音楽監督を10年間務め、その後同楽団名誉指揮者に就任した。国内では新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、「サントリー1万人の第九」総監督などを務める。CD録音は多数あり、最新盤としてトーンキュンストラ管弦楽団を指揮した22枚目のCD『マーラー：交響曲第6番』を25年5月にリリース。著書に『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP文庫／新書）など。出光音楽賞（1991年）、モンブラン国際文化賞（2003年）、渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2003年）、岩谷時子賞（2014年）、文部科学大臣表彰（2024年）、外務大臣表彰（2025年）などの受賞歴がある。

オフィシャルファンサイト <http://yutaka-sado.meetsfan.jp>

上原ひろみ [ピアノ] Hiromi Uehara, Piano



1979年静岡県浜松市生まれ。17歳の時にチック・コリアと共演。99年パークリー音楽院に入学し、2003年ジャズの名門テラークより『Another Mind』で世界デビュー。08年チック・コリアとのアルバム『Duet』を発表。11年には『スタンリー・クラーク・バンドフィーチャリング上原ひろみ』で第53回グラミー賞「ベスト・コンテンポラリー・ジャズ・アルバム」を受賞。16年上原ひろみザ・トリオ・プロジェクトfeat. アンソニー・ジャクソン & サイモン・フィリップスとしてのアルバム『SPARK』がアメリカのビルボード・ジャズ総合チャートで1位を記録。21年「東京2020オリンピック開会式」に出演。23年映画『BLUE GIANT』では音楽監督を務め、第47回日本アカデミー賞「最優秀音楽賞」を受賞。

ニューヨーク・ブルーノートでは日本人アーティストとして唯一20年以上も公演を成功させている。25年にはHiromi's Sonicwonderとしての最新作『OUT THERE』をリリース。

Program Notes ●石川亮子 [音楽学]

モーツァルトが自身の協奏曲について、「難しすぎるものと易しすぎるもののちょうど中間のもので——とても豪華絢爛としていて——耳に快く響きます」と書いた言葉は、交響曲とはまた違った協奏曲の魅力をよく伝えている。ガーシュウインの「ピアノ協奏曲へ調」と、バルトークの「管弦楽のための協奏曲」。後者はバッハの「ブランデンブルク協奏曲」など、バロック特有の合奏協奏曲（複数の独奏楽器と合奏のかけ合いで演奏される）を現代風に、作曲家バルトークの説明を借りれば、オーケストラの「個々の楽器や楽器群を協奏曲風に、もしくはソロイスティックに」扱うことで実現したものと言える。アメリカのジャズと、ハンガリーの民俗音楽。タイプも語法も全く異なる2つの協奏曲が、いずれも20世紀前半のアメリカで生まれたことは、20世紀が激動の時代であったことを物語っている。

■ ガーシュウイン：ピアノ協奏曲 へ調

“全世界の音楽への貢献” ▶

「彼にとって音楽は彼が呼吸した空気そのものであり、（中略）彼が成し遂げたのは、アメリカ国民音楽のみならず全世界の音楽への貢献であった」。ジョージ・ガーシュウイン（1898～1937）の急逝を悼んでシェンベルクが語った言葉は、作曲家ガーシュウインの本質を的確に言い表している（十二音技法の創始者であるシェンベルクは、ナチス・ドイツの台頭するヨーロッパを離れてアメリカに移住。カリフォルニア州ビバリー・ヒルズに暮らし、ガーシュウインとはテニスと絵画の友であった）。1920～30年代のアメリカにおいてガーシュウインは、ジャズを中心とするポピュラー音楽とクラシック音楽を融合させた、独自の語法を確立していった。アメリカ音楽のみならず、20世紀オペラの金字塔と評される『ボーギーとベス』は1935年に初演されている。「ピアノ協奏曲へ調」はその約10年前に作曲された代表作のひとつで、「ラブソディ・イン・ブルー」の翌年にあたる1925年に完成された。

意欲と探究心が ▶
スケッチに

「ピアノ協奏曲へ調」は、「ラブソディ・イン・ブルー」を聴いたニューヨーク交響楽団（のちに吸収合併されニューヨーク・フィルハーモニックとなる）の指揮者ウォルター・ダムロッシュから、「次はカーネギーホールで初演するためのピアノ協奏曲を」と委嘱を受けて書かれた作品である。ラブソディックな単一楽章であった前作に対し、ガーシュウインは協奏曲の歴史や作曲法、さらに管弦楽法に関する著作を読み込み、本作を伝統的な3楽章によって、ピアノ・パートだけでなく全オーケストレーションも自ら手がけて仕上げていった。スケッチには急・緩・急の3楽章に対応するように、「リズム」

「メロディー（ブルース）」「もっとリズム」と書き込まれており、いかにしてクラシックの協奏曲とジャズの語法を統合するのかという、ガーシュウィンの意欲と探究心をうかがうことができる。オーケストラもほぼ標準的な3管編成で、サクソフォンやバンジョーといった楽器は含まれていない。

第1楽章は「チャールストンのリズム」による。オーケストラによる第1主題の提示に続いて、独奏ピアノが魅惑的な第2主題を奏でる。展開部に入ると、軽快なリズムに乗った新たな主題が登場し、それがカンタービレでロマンティックに歌い上げられた後に、ジャズ風にリズムミックスに変奏される。再現部は第2主題の壮大な再現によって開始され、コーダでは第1主題の要素が次々と現れて熱狂的に締めくくられる。

第2楽章は「詩的で夜の雰囲気」を持ち、ミュート付きのトランペットが奏でるブルースとともに印象的に始まる。2つ目の主題もリラックスした美しさをたたえる。

第3楽章は「リズムの饗宴」となり、冒頭のロンド主題が繰り返される間に様々なエピソードが挟みこまれていく。それらエピソードの多くは先行する2つの楽章の各主題によっており（例えば、最初のエピソードは第1楽章第2主題のアップ・テンポ・ヴァージョンである）、最後はロンド主題に第1楽章の第1主題が重ね合わされて晴やかに終わる。

〔楽器編成〕ピアノ独奏、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、吊しシンバル、小太鼓、トライアングル、ゴング、スラップスティック、シロフォン、グロッケンシュピール、ウッドブロック、弦楽5部。

■ バルトーク：管弦楽のための協奏曲 Sz. 116, BB 123

ピアニスト、民俗音楽研究者、作曲家。20世紀を代表するハンガリーの音楽家、ペラ・バルトーク(1881~1945)には3つの顔があった。ブダペスト音楽院のピアノ科教授を務め、東ヨーロッパからトルコ、北アフリカまでの膨大な音楽を収集・研究したバルトークは、ドビュッシー、シェーンベルク、ストラヴィンスキーといった同時代の音楽も敏感に吸収し、民俗音楽研究の成果に基づく真の意味で独創的な音楽を生み出していった。

ファシズムや国家社会主義に反対していたバルトークが、アメリカに移住したのは1940年のことだった。そして経済的困窮と深刻な病気に苦しむ彼のもとに、1943年5月初め、指揮者クーセヴィツキーの財団から新作の委嘱が届く。1942年に亡くなったクーセヴィツキー夫人ナターリヤの思い出に捧げるオーケストラ作品、というのが条件であった。「管弦楽

のための協奏曲」の集中的な作曲は「1943年8月15日から10月8日」に行われており、ここから作曲家バルトークのアメリカ時代が始まることになった。バルトーク自身も本作について、「冗談めかした第2楽章を除いて、第1楽章の厳格さ、第3楽章の悲痛な弔いの歌から、終楽章の生の肯定に向かって次第に移行していく」と説明している。

第1楽章「序章」は序奏付きのソナタ・アレグロ楽章。冒頭の低音はすべて完全4度と長2度で構成されており、バルトークの特徴的なスタイルを示している。第1主題から第2主題への推移でトロンボーンによって奏される主題が、展開部後半で金管楽器によるフガートとなって目覚ましいクライマックスを築く。再現部は第2主題、第1主題と逆に再現されることで、楽章としてアーチ型の構造が形成される。

第2楽章「対の遊び」は一種のスケルツォ楽章で、バルトークは後に「対による提示」と改題している。対(ペア)で並進行する管楽器が旋律を受け継いでいき、中間のトリオには金管楽器によるコラールが置かれる。

第3楽章「悲歌」はバルトーク特有の「夜の音楽」で幕を開ける。作曲者自身の解説によれば、ここでは「3つの主題が次々に現れる」。第1主題と第3主題は第1楽章の序奏から派生したもので、真ん中の第2主題(全曲の中心でもある)では、ヴィオラがハンガリーやルーマニアの葬送歌を思わせる旋律を鳴咽するように歌い上げる。

第4楽章「中断された間奏曲」は2つ目のスケルツォ楽章に相当し、A(a-b-a)・中断・A(b-a)の構成をとる。bの音楽は、ヴァンツェのオペレッタ『ハンブルクの花嫁』のアリア「美しく素晴らしいハンガリー」との類似が指摘される。また中断部分については、レハールのオペレッタ「メリー・ウィドウ」の「マキシムの歌」や、ショスタコーヴィチの交響曲第7番「レニングラード」の「侵入の主題」の引用であるとも言われる。

第5楽章「終曲」は圧倒的なフィナーレ楽章で、「ある程度規則通りのソナタ形式」(バルトーク)による。疾走する無窮動の第1主題、オクターヴ下行で始まる穏やかな第2主題、そして小結尾部ではバグパイプの音楽の模倣に続き、トランペットによる新たな主題(ハンガリーの「豚飼いの角笛」の旋律を模したものと説明される)が登場する。展開部はこの主題によるフガートで始まり、最後も同主題の高らかな再現から輝かしいコーダで一気に閉じられる。

〔楽器編成〕フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、クラリネット3(バスクラリネット持替)、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タムタム、吊しシンバル、ハーブ2、弦楽5部。